

中長期目標 (学校ビジョン)	21世紀に生きる社会人として、生きる力と豊かな人間性を育成する。 ・多様な生徒に応じた教育課程・クラス編成等により、学力の向上と進路を実現する。 ・切磋琢磨し、自己の多様な能力・適性を発見して才能の開花を図る。 ・地域に信頼され、地域の期待に応え、地域を支える学校づくりをすすめる。	今年度の 重点目標	1. 基本的生活習慣の確立とコミュニケーション力の向上 2. 学ぶ姿勢を確立して目指す進路を実現 3. 部活動の振興を基軸としたチーム境高意識の高揚 4. 人としての教育を重視し命の教育を充実
	校訓 「文武両道」「質実剛健」		

年 度 当 初				評 価 結 果 (中間評価)		
評価項目	評価の具体項目	現状（28年度の実績から）	目標（29年度の目指す姿）	目標達成のための方策	達成状況	評価 改善方策
1. 基本的生活習慣の確立とコミュニケーション力の向上	○規律ある高校生活を送ること。 ○自他を大切にすること。 ○ケータイ・スマホ等のSNSの使用による生徒間のトラブルが発生しないこと。	○基本的生活習慣の確立など規律ある高校生活が定着してきており、服装指導も徹底している。 ○ケータイ・スマホ等のSNSの安易な使用が見られ、生徒間のトラブルに発展するケースも見られる。 ※挨拶・服装などだけある学校生活ができた 生徒96.3% 教職員78.3% ※自他を大切にできた 生徒96.7% 保護者86.6% 教職員56.8%	○挨拶の励行、服装・清掃指導等の徹底 ○人間性やコミュニケーション能力の向上 ○けじめある生活態度の確立 ○自他を愛し、人権を尊重する意識の高揚 ○情報モラル教育の充実 ○SNSの安易な使用によって相手のことを慮らない行為の根絶	○生徒の自主活動を促し、生徒活動の充実を図る。 ○服装・頭髪・挨拶等について生徒の自覚を高め、服装再指導による個別指導の徹底を図る。 ○交通規則（法規）遵守、携帯電話・スマホ等使用上のモラルの向上を図る。 ○整理整頓、貴重品管理等、日常の生活意識の向上を図る。	○ベアやグループなど協同学習の場面を多く取り入れた、ともに学びあう姿勢の構築に努めた。 ○情報モラルについては、情報の授業で扱った。 ○多くの生徒は守れているが、一部服装等の乱れ、言葉遣いの乱れ等が見られる。 ○選択教室の使用状況が良くない(ゴミ、落書き等)。 ○年度当初にSNS等に関する講演会を行ったことや集会等による講話など効果があった。 ○授業におけるチーム学習を通して、自主性やコミュニケーション能力の向上を促す事が出来た。 ○学年集会を幾度も行い、本校生徒のあるべき姿について考えさせ、モラル向上を図っている。 ○社会人講師による授業では、いろいろな考え方に気づき、社会を知るよい機会にもなっている。 ○食物室では調理実習の際、境港市の分別方法に応じてゴミを分別して出すことを行っている。 ○生徒会執行部中心にマナーアップや学校行事などで自主的な活動が見られた。 ○グループワークやプレゼンテーションの機会を通してコミュニケーション能力の向上が図られている。	B
	○主権者教育、消費者教育、環境教育などの取組をととして、社会人講師（地域で活躍する大人など）の話を聞く機会を生徒ひとり当たり3年間10回以上設定すること。 ○環境改善や校内美化に対する意識を高めること。	○生徒会執行部を中心とした生徒の自主活動（学校祭をはじめ中学生への学校ガイダンスなど）が充実してきた。 ○ゴミの減量化や消費電力削減で大きな成果があった。環境委員会を中心に生徒主体の取組は改善の余地がある。また、ゴミの捨て方が徹底できなかった箇所の改善が必要である。 ※校内美化を推進できた 生徒88.5% 保護者75.9% 教職員59.5%	○生活指導と結びついた体験的な教育活動 ○社会に参画する力の育成 ○生徒が主体となって取り組む学校環境の整備	○ボランティア活動への参加を奨励するなど、生徒が学校とは異なる集団の中で自己を表現する場面を設定する。 ○県教委事業（生徒と社会がつながる教育推進事業）と連携するなど社会人講師の活用の充実を図る ○日々の清掃活動や学校周辺清掃の徹底、ゴミの分別・減量化を引き続き推進する。（平成25年度との比較で6％減の実現） ○健康観察等の充実と適宜声かけ等親身な指導を推進する。		
2. 学ぶ姿勢を確立して目指す進路を実現	○教科書等授業に必要なものをきちんと準備する等、授業を受ける構えができていること。 ○「進路目標を定め、その実現に向けて家庭学習を進めた」と回答する生徒の割合が5割を超えること。	○昨年度から放課後講習の改善、面談指導の充実を重点的に実施している。 方、部活動との両立に悩む生徒や学力不振者に対するきめ細かな指導が十分とはいえない面もある。 ○提出を義務づけられた課題等には取り組みが、自ら進んで学ぶ姿勢が今後も求められる。 ○「進路目標を定め、その実現に向けて家庭学習を進めた」の項目に「あてはまる」と回答した生徒は全体では24.9%であった。	○生徒の主体的で自発的な学習活動の確立 ○教科担当者による個別面談指導の強化 ○学習のつまずきを随時克服する体制の構築 ○週明けテストをはじめ校外模試等を大切にする態度の確立	○5分前行動を徹底し、授業開始と同時に授業が始まるという当たり前のことを徹底する。 ○主幹教諭等を中心とした個別面談を実施し、的確な進路指導を推進する。 ○校外模試・週明けテスト等について、指導監督体制を改善し、受験する態度や雰囲気づくりに工夫を図る。 ○放課後講習の細分化を具体化し、適宜受講生徒の状況を把握し、講習内容等改善を推進する。	○主幹教諭を中心に、担任・生徒からの進路希望を聞き取り、よりよい進路選択を促すことができる。 ○現段階のセンター受験希望者は全体の半数となった。 ○授業規律の徹底に努めた。 ○英語多読多聴の講師を招き、出前授業を実施。今年度は2学期にも1回予定している。 ○今後予定されている大学入試の改革に備え、外部試験を意識した内容を授業に取り入れ始めた。（スピーキングテストなど） ○課題や宿題への取り組み状況を見ると生徒の主体的で自発的な学習活動が十分に確立されているとは言えない。 ○週明けテストや校外模試を大切にすることを徹底している。 ○模試結果の活用を含め学力向上の方策を学校全体で再考する必要あり。 ○アクティブラーニング型授業の全体公開（参観人数が少ない）など研修体制の活性化を図る必要あり。 ○授業に対する姿勢は前向きであるが、その場限りの感が有り、自主的に意欲的に学習に取り組めていない。 ○アクティブラーニングやICTを積極的に取り入れ活用した授業もあり、生徒の主体的に学ぶ姿勢の向上に役立った。 ○進路指導については面談を含め、担任中心で行っており、その情報は学年団で共有している。 ○放課後、3年団では学習室を設定し、自主的に居残り学習を行っている。9月段階で毎日30～40人が利用し、取り組んでいる。 ○プリントやファイルの点検を行い、生徒の学習理解度を確認している。 ○授業を通して、主体的な学びにつながるよう、生徒の興味関心を高める工夫を行っている。具体的には、映像教材の使用や発問の工夫、話し合いの導入など。一部の生徒には日頃から学ぶ姿勢が見られ、効果が表れているが、全体的には身についていない生徒が多い。 ○課題テストの取組状況が良くない（課題を全くやっていない、勉強していない生徒が複数いる） ○夏季休業中の指名講習など成績不振者に対する手立てが取られているが、参加すればなんとかと考えている生徒もいて、その場だけの指導になっている。	C
	○教員が授業内容や授業展開を工夫し、生徒の興味関心を高め、理解度を高めること。 ○タブレット端末等のICTを活用した生徒主体の授業を6割以上の教員が実践すること。	○授業参観週間中の授業実践・研究協議が教職員のスキルアップにまだ十分とはいえない。 ※授業理解（工夫） 生徒69.6%、保護者58.3%、教職員56.8% ※授業重視（授業研究充実） 生徒79.2% 教職員62.1% ※授業の内容理解 生徒69.6% 保護者58.6% 教職員56.8%	○アクティブラーニング型授業を取り込んだ授業研究会並びに授業参観週間での各教科代表による公開授業の定着 ○生徒が主体的に深く学ぶことができる授業の展開	○生徒の主体的で深い学びを実現するため、アクティブラーニング等授業法の研修を重ね実践に活かす。 ○英語多読等の特色ある学習指導方法の充実発展を図るとともに、外部講師等と連携した出前授業の機会を増やし、指導法の改善を図り、学習意欲を高める。 ○ICTを活用して生徒が主体となる授業方法の研究を進める。		
	○進路希望の実現を図ること。 ○大学入試センター試験の出願率が5割、国公立大学現役進学者数が20名を超えること。	○学力上位の生徒の学力を伸ばさせていない。 ○大学入試センター試験の出願率は、36.5%（平成28年度）であった。 ※進路実現への取組 生徒66% 保護者82.4% 教職員59.5%	○キャリア教育全体計画に基づいた明確な進路目標を設定 ○3年間を見通した指導による進路希望の実現 ○生徒が3年間をとおして進路目標を持ち、その実現に向けて努力する姿の確立 ○習熟クラス等の目的別クラス編成に応じた丁寧できめ細やかな学習指導の実践	○校外模試対策等の充実を図り、受験に対する意識を高める。 ○目的別クラス編成に応じた授業展開を推進し、ノート点検・副教材・小テスト等を多角的に授業に取り入れ、授業を基軸とした学習習慣を確立する。 ○センター試験受験体制の見直しなど思い切った改革を進める。		
3. 部活動の振興を基軸としたチーム境高意識の高揚	○個々の能力や適性を発揮し、多くの部活動が全国大会等で活躍することで、学校の活力を高めること。 ○全国大会出場者100名を超えること。	○全国大会出場者数は97名 ○硬式野球部の甲子園大会出場やヨット部の団体準優勝、男女ハンドボール部や吹奏楽部などの全国大会出場など部活動が活性化している。 ※部活動充実 生徒96.3% 保護者87.4% 教職員86.5%	○部活動の充実による特色ある教育の実践 ○文武両道の活力があり地域の誇りとなる普通科高校として存在 ○県トップレベルの実績を持つ部活動を維持育成し、学校内外に活力ある境高を発信 ○地域のボランティア活動への積極的な参加 ○部活動において地域の人材の力を借りたり、生徒が小中学生に学習やスポーツを指導したりすることで地域の信頼を獲得	○主幹教諭等を中心に生徒が部活動と学習活動の両立を図ることができるよう、部活動だけに偏るような生徒については意識変更を図る。 ○全教職員が一丸となって組織的に部活動を奨励し、その発展を図る。 ○施設・設備等の充実を推進し、部活動にしっかりと取り組める教育環境を整える。	○ハンドボール部のインターハイでの1勝（1回戦突破）、ヨット部の全国優勝など活躍が目立った。 ○インターハイをはじめ、全国大会の出場・活躍がみられる。 ○検査前の部活動の活動自粛や休止が徹底されていない。 ○県トップレベルの実績には届いていないが、部活動を通じた人間性の育成など十分な成長が見られる。 ○定期考査前の部活動時間はこれ以上調整しにくい中で、クラスに対して考査の意味合いを伝えている。たいていの生徒は文武両道に対して前向きに頑張っているが、一部生徒は未だに部活動に偏っている。 ○実習や授業の様子をホームページに載せることにより、情報を発信することができている。 ○学校ホームページは随時更新できている。保護者の要望を受け、広報誌に進路選択のための情報を掲載した。 ○全国大会等に出場する生徒も少数ではあるが出ている。部活動等を通して、基本的生活習慣の確立を図っている姿が見られる。 ○部活顧問と生徒の状況を共有しながら指導できている。 ○高大連携の出前授業を本年度も計画している。	B
	○小・中・高・大の連携により、人的交流や授業連携・研究交流を充実させ、教育活動の活性化を図ること。 ○キャリア教育やボランティア活動等とおして地域との連携を図ること。	○スクールプロジェクトやスクラム教育など異校種間交流（連携）が昨年度も充実、また保育実習等の進路実現に密接につながりのある取組も充実してきた。 ○島根大学等への大学訪問は大きな刺激となった進路意識・学習意欲の向上につながり効果が大きい取組になっている。 ○スクラム教育等とおして、異校種間の教職員連携が進んできた。 ※「スクールプロジェクト」小学生95% ※「中三学習会」中学生86.9% ※「大学等連携（大学訪問・企業訪問）」生徒41.9%	○高大連携（大学・専門学校訪問など）などの異校種間交流（連携）をとおして、異校種の児童・生徒・学生等と関わりを深め、価値観の異なる他者とのコミュニケーションを図る力を育成	○境高スクールプロジェクトを年6回実施する。 ○1年次生キャリア研修では、地域の企業等から講師を招き、将来地域の発展に貢献する意欲を育てる。 ○境港地区における基礎学習・生涯学習の中心となるような未来の境高づくりを検討する。 ○キャリア教育全体計画に基づき、各事業の目的を明確化し、共通認識のもとで行う指導を徹底する。		
	○PTA、同窓会等とも協力して、地域活動へ積極的に参加し、地域から期待される学校づくりを進め、チーム境高の意識が高まること。	○生徒の活躍やPTAの活動を随時HPに掲載できた。 ○校外での活動（地域連携）充実も進んできた。 ※学校HP充実 保護者72.6% 教職員78.4%	○学校のホームページ（学校行事・PTA活動などを含む）の充実 ○地域や保護者と連携した開かれた学校を構築	○学校の情報を速やかに学校ホームページに掲載し、情報発信を展開する。 ○学校生活の基盤である良好な人間関係を育成し、家庭と連携して生徒の指導にあたることを徹底する。		
4. 人としての教育を重視し命の教育を充実	○自他を認め合う人間関係づくりにつながる取組を各分掌等が企画・実施すること。	○一部生徒の中に人権意識に欠ける言動があったり生徒が悩んで相談する場（機会）が不足していたりする現状がある。	○人間教育全体計画（境高システム）を作成し、各分掌等での取組を整理	○個別の指導体制の充実を図る。 ○既存の校内専門委員会が対応しきれない事案に対応できる新たな委員会を立ち上げる。 ○連絡即対応のサイクルの徹底を図る。	○大学での研究をもとに、特別支援教育の観点からの授業改革に取り組み、わかる授業を心がけた。 ○問題行動等があった際、事後の指導・支援を慎重に時間をかけて行っている。 ○様々な生徒に対応できるよう、体制を整えている途上である。 ○全体計画の作成、各分掌等の体制もでき、取り組む姿勢が整った。 ○担任が各クラスにおいてSHR時にモラルに対する指導もしているが、現状としてクラス担任の能力に期待する部分が大きく、効果的な手法を模索中。 ○実習やグループワークの班を毎回かえ、生徒がクラスのいろいろな生徒と関わる機会をもてている。 ○9月以降、人権教育LHR実施にむけて、人権福祉委員会を中心とした生徒たちの主体性のある活動を組織していく予定である。	C
					○生徒・教職員ともゆとりある時間の中で、面談や話のできる場を設けることが必要。 ○気になる生徒については担任や各方面への連絡・相談をスムーズに行う。 ○全体的な指導体制のさらなる充実を検討。 ○今後、これまで以上に全職員に周知徹底し、すぐに対応できるよう、努める。 ○日々の活動や人権LHRおよび講演会を通して人権意識を高める。 ○規範意識・人権意識は担任だけでなく、クラスや生徒に関わる副担任・部活顧問・教科担当など多くの教員に関わることで形成されるため、学校全体で生徒を育てる手立てが必要。（例えば授業の中・部活動の中・普段の会話などで意識的に触れる） ○担任や教科担当の先生、保健部の先生との連携の強化。 ○現状にあった形で、生徒同士の係わり合いと学習の機会を設けられるよう努力する。 ○現行の教材で、命について考えることができる教材を扱うこともあり、さまざまな形式で、生徒同士の思いを共有したり、教員からの示唆を与えたりする機会を大切にする。 ○専門機関を活用し、2年生で予定のデッドD.Vについての学習会の内容を全学年に反映させる。 ○教育相談室のPRに努める。保健室との連携を高め、生徒の実態把握に努め、学年団との連携に活かす。また専門機関とのパイプ役として相談機関の紹介の場を設ける。	